
逆さまピエロ

永崎了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆さまピエロ

【Nコード】

N0539P

【作者名】

永崎了

【あらすじ】

『子どもが夜に街中を彷徨すると、ピエロにさらわれてしまう』
そんな噂が流れている、上郷中学校。決して規模の大きくないこの学校で噂が広まるのに、それほど時間は必要なかった。

「その糞ピエロの正体なんか、俺たちで暴き出してやろうぜ！」
校内での屈指の悪戯グループのリーダー、杉山智は高々と言いつつ放った。

グループの中に、彼に逆らえるものは一人としていなかった。
そしてある日、彼を先導にして十数人の生徒たちが夜の街を駆

け巡った。

——ちょうど、その日だったろうか。

“十数人の中学生が、行方不明になった”のは。

一、ピエロは斯く生まれし

それは、僕が小学校六年生の時のことだ。

修学旅行前夜になって、親が真剣な面持ちで僕にこう言った。聞き流していたので何と言っていたか良く分からなかったが、大体こんな感じだろうと思っていた。

『深夜の街を出歩いてはいけませんよ。ピエロに遭うかもしれないからね』

その言葉を聞いて、恐らく当時の僕は驚くと同時に、好奇心に駆られたのだと思う。だから旅行先で旅館脱走計画なるものを企てて夜の街に飛び出して、ピエロに遭おうと画策したのだと思う。

ピエロとは、一体何者なのか。僕は純粹に、ただそれが知りたいだけだった。

一緒に旅館から駆け出した四人の仲間とは別行動をして、各々持ち寄ったトランシーバーで連絡を取り合おう、ピエロを見つけたら全員に連絡しよう、と言う取り決めの上、僕たちは闇に紛れた町を駆け巡った。今でもその時の光景は、脳裏にまざまざと蘇ってくる。溢れる電飾。物言わぬ信号機。僕らを奇異の視線で見つめる雑踏。その全てが田舎町で育った僕にはまるで幻影のように見えて、一種の陶酔状態に陥ってしまったのではないだろうか。

だから、あんな過ちを犯してしまったのかもしれない。

旅館を飛び出してから、一時間。そろそろ僕たちが居ないことに気付き始めるだろうと察した僕は、トランシーバーで同志たちに連絡した。

だけど、僕の耳を貫くのは空しいノイズだけだった。

僕はその時初めて気付いた。

仲間たちは、もうここには居ない。無線機の届かない場所へと行ってしまったか、連れて行かれてしまったか、あるいは――。

急に不安と恐怖で体が震え始めた。秋の夜半に、薄手の長袖一枚

では寒すぎた。僕は急いで人のいない路地裏に、逃げるようにして走りこんだ。ビル風が、僕の体から希望と言った類のものを全て吹き飛ばした。長い間走り回っていた所為か、足が鉛のように重かった。夜の街は全てを僕から奪っていった。

寒さで歯の根が合わなくなり、段々と焦点もずれてゆく。息を潜めた猛獣が背後に迫ってくるかのような感覚に襲われて、全身の肌と言う肌から汗が一斉に噴き出した。

——嫌だ、嫌だ。

死にたくない、死にたくない。

そうやってうわごとを繰り返していた僕は、いつ来るかも分からない死の恐怖に怯えを隠せなかった。今すぐにでも街から旅館に逃げ込んでしまいたかったが、走りすぎた所為で足も動かず、元来た道も良く分からなくなってしまうていた。僕の意識は次第に夜の悪魔に蝕まれて、すうつと、どこか深い深いところへ、ただただ落ちていくばかりだった。

そして……………

夜の街の隅っこで、一人きりのかくれんぼを始めてから、どのくらい経っただろうか。

一時間か、二時間か。それとも一日か、一週間か。分かることは空が何回か明暗を繰り返したことだけで、もはや時間感覚が狂ってしまっていた。それだけではない。

空腹の感覚もなければ、寒さも感じない。誰かのこと、何かのことを思い出そうとしても、何かがそれを阻んで、僕の記憶から追いついてゆく。

……つまり、何が言いたいのか。簡潔に言ってしまうえば、僕は普通ではなくなっていた。

もう少し、正確さをにじませるならば。

あの、旅行前に親が言った言葉の、本当の意味を知ってしまったならば、こう言えた。

『深夜の街を出歩いてはいけませんよ。ピエロになるかもしれない』

からね
『

僕は、ピエロになっていた。

二、普通を愛する者

コンクリート製の床を、黄砂混じりの風が吹き付ける。遠くの景色がかすんで見えない空はいつもより数段濁って、まるで学校を異次元に隔離している様にも感じられた。

遼一は真っ白の空を見上げながら、屋上に寝転んでいた。時折黄砂が目に入ってしまったのが鬱陶しくもあったが、彼が自らの平穩を手にするにはこうするしかなかった。理由は明白、彼の“所属”するグループがある作戦を企てているからだった。

それは言うまでもなく、「ピエロを捕まえる」と言う名目の夜遊び作戦。

正直言うと、遼一はそんなことに興味はなかった。というより、ピエロといったオカルトや宗教じみたことを信じようとは思わなかった。第一本質が明らかでないものを信じるなど馬鹿馬鹿しかったし、面倒臭かった。

だから彼らに捕まらないように、遼一はここへ逃げ込むように隠れている。

だがそれも、すぐに破られてしまうことは自明の理だった。

「おい遼一！ 隠れてるのは分かってんだ！ さっさと出てきやがれ！ 逃げるなんて許さねーぞ！」

怒号を撒き散らして叫んでいるのは、尚輝のグループのリーダーである荒巻。ハスキーな濁声は、一度聞いただけで耳にこびりついてしまうほど嫌な声だった。

遼一は屋上に設置されてある貯水タンクの裏に身を隠すように潜むと、何かを憂えているわけでもなくため息を吐いた。

「あいつらは何をやってるんだろっなあ……」

遼一が通っているのは、私立の進学校、上郷中学校。当然、進学校と言うのは大義名分で、半数の卒業生は商業や工業系の高校に流れていく。上等な高校に進学するのは、ほんの一握りだ。そして遼

一はどちらでもなく、平々凡々な高校に進学すると決めていた。理由は簡単。「色々考えるのが面倒臭いから」。

普通に進学して、普通に大学に入り、出来るならば普通に就職して、普通に生きていく。遼一は何よりも、「普通」と「平凡」の二文字を愛していた。本当に、望んでいるのはそれだけだった。

それなのに。

遼一の周辺は、その、遼一の望む「普通」を侵蝕して行く。

「やっぱりここに居た」

後ろからいつも通りといった調子の声が、ため息を孕んで覗かせる。

「遼一、あんたまたここに来てるのね。いい加減別の場所にしないとばれるわよ」

「……つたく、余計な世話焼いてんじゃねえよ」

次の瞬間、遼一の目の前に現れたのは見慣れた女子が屹立する姿。小学校時代からの腐れ縁であり、同時に遼一の「保護者」的な立場になぜか落ち着いている、雨宮翔子だった。

翔子は遼一の眼前にずいといと乗り出すと、苛立ちをにじませる顔で良い募った。

「あんたの所為で私まで悪者扱いにされてるんだからね！ 少しは私の立場も考えなさいよ！」

「お前が勝手に自分を追い込んでるだけだろう、自業自得だ」

「あ、の、ねえ……………」

瞳が怒気で満ちる翔子。言い過ぎたか、と遼一が思った時には、遅かった。

次の瞬間——翔子の鉄拳が遼一の右頬に炸裂。空手で鍛えられたその右ストレートは、いとも容易く遼一を屋上の端まで突き飛ばした。学ランが、ざらざらとコンクリートで汚れる。遼一に口の中に鉄の味を覚えた。どうやら、口内を切ってしまったようだ。た。「私はあんたのことを思ってたよ！ 少しくらい感謝したらどうなの！？」

「グダグダうつせえな。俺が望んでもねえことを勝手に仕組んで、何が感謝だ。呆れも甚だしい」

遼一は少しも痛がる素振りを見せず、ゆっくりと立ち上がった。眉根を寄せて、地面に血の混じった唾を吐く。そして、翔子を強く睨んだ。

「俺は俺のやりたいようにやる。これ以上俺に関わるな」

翔子は僅かに仰け反ったが、負けんばかりの勢いで言う。

「で、でも……、グループに残るにはこうするしかないことは分か
つてるでしょ！」

「それが要らねえつつつてんだ！ 何度も言わせんじゃねえ！」

遼一の大音声に、さすがの翔子も押し黙る。

「グループだろうが荒巻だろうが、俺は俺だ。俺は誰の言いなりにもならねえし、従うつもりも、従えるつもりもねえ。……一匹狼？

上等じゃねえか。俺は普通に生きて、一人でのし上がってやんよ」

何も言えずに立ち尽くす翔子を横切って、遼一は振り向かず、

「………普通を愛して、何が悪い」

そう言って、屋上の扉をくぐっていった。

残された翔子は、砂の混じった風を身体に受けながら、扉を悲し
そうな目で見つめていた。そして、

「……それが普通じゃないからよ」

小さく、泣きそうな声で呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0539p/>

逆さまピエロ

2010年11月21日21時55分発行